

# 身近なまちの風景物語(39)

## 健幸の素地

炎天下、少し日陰に入りたい。喉を潤したい。休みたい。荷物を置きたい。

夏に限らず、そうした時はどうするだろう。近くに公園がみあたらなければ、スーパーやコンビニを探すかもしれない。

各地でにわかベンチを見かける機会が増えてきた。通りに面して置かれている。特定の誰かを対象にしていなさそうだ。多くは簡素な形で、DIY感覚の手づくりと思わせるものもある。一方で色やデザインは多種多様だ。

まちによってベンチを設置する主体も目的も異なる。ただベンチの利便性に違いはない。歩行者や利用者には様々な恩恵がある。

誰でも座れるベンチはまちのインフラだ。しかも最小のインフラと言って良いかもしれない。

まちに出かけるきっかけにもなる。一定の間隔で常にベンチがあれば、安心してまちに出かけられる。足腰の弱い高齢者もまちに出やすくなる。歩き疲れた子どもを座らせて休ませることができる。荷物を置いて、汗をふくこともできる。

ベンチに座っていると、通りかかる顔見知りと挨拶する。世間話をする。横に座ってよもやま話に興じる。楽しいひと時になる。通るだけの道から人が佇む道になる。

もちろん商店街などでは誘客を目的の一つとしている。ただそれ以上の効果と期待がある。家の外に出る、まちを歩く、会話をする、そうした行為は心身の健康につながる。

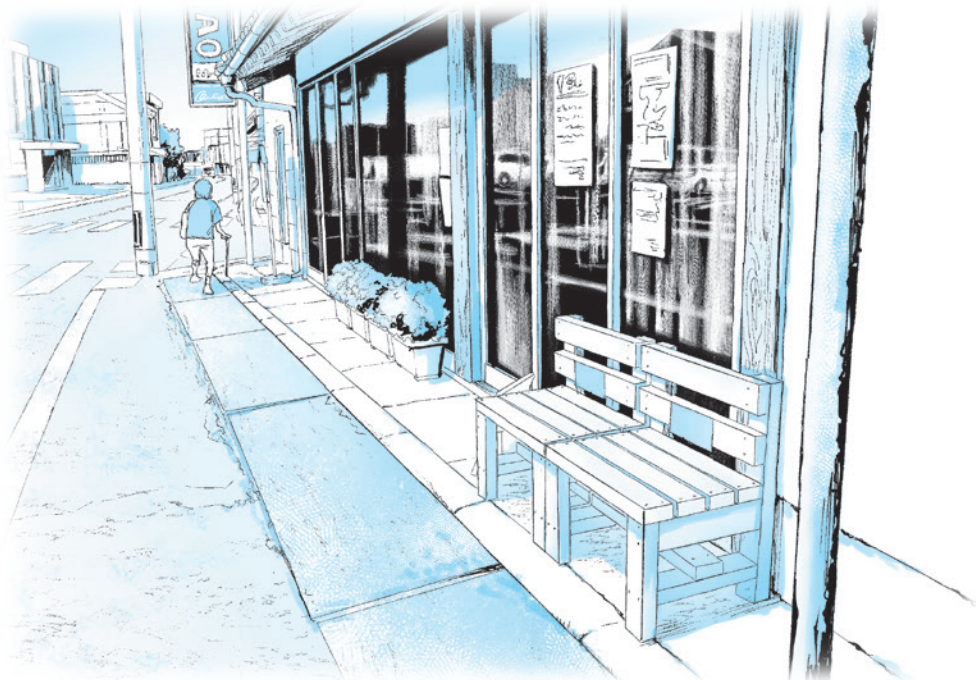
まちに暮らす人々が行き交うことは賑わいはもとより、笑顔の花が咲く。わたしたちはまちの一部になる。生活者たちの健康はまちの健康であり、まちの財産だ。

ベンチを見ると、そうした期待が込められていると想像し、思いを募らせる。

ベンチが待っている。ベンチが語りかけている。ちょっとした工夫が、人がいる風景、顔が見える風景へと変わる仕掛けになる。

野中 勝利

筑波大学 大学執行役員 芸術系長 教授



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程2年）